

御 挨拶

中 村 歌右衛門

皆様、本日はお暑い中をわざわざお越し下さいます誠には有難うございます。

「葉月会」も今年は第四回を開催いたすことになりました。これもひとえに皆様方の温かいご支援によりますものと深く感謝いたしております。

「葉月会」は、中堅、若手俳優の技芸の発表の場であるとともに、歌舞伎邦楽の若手の勉強発表もさかんになつてきまして、まことに喜ばしいことと存じます。

第二回から、お芝居の発表に力を入れましたところ、ご好評をいただきまして、出演者一同、たいへんに張りきっており、「どんどろ大師」「朝顔日記」といづれも義太夫狂言の大物を稽古して発表してまいりました。今年はいへん珍しい狂言を選び、俗に「身売りのかさね」と呼ばれている「薫樹累物語」を勉強いたすことになりました。たいへんむづかしいでございます。一同の稽古熱心にめんどじてどうぞご覧下さりまして、ご遠慮のないご意見なり、ご感想をお聞かせ下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

加えて、邦楽若手の勉強の成果を三番の舞踊にとりそろえまして合同発表という形で力をそそぎました。

いづれにしても、未熟者ぞろいでございますので、お目まだるい点が多々あると存じますが、なにとぞ温かいご声援のほどをお願い申し上げます。

なお、毎夏の開催にあたり、惜し身なくお力添え下さいます指導の諸先輩はじめ関係者各位、殊に、国立劇場の皆さんには多大のご協力をいただき、本當にありがたく、この機会に厚く御礼申し上げます。

(伝統歌舞伎保存会会長)

昭和六十年八月

第四回 葉月会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優
歌舞伎邦楽若手
研修発表会

上 草 摺 引
藤間勘五郎 振付

長唄囃子連中

加賀屋 歌三郎
中村 占三郎
中村 仲次郎
坂東 大和次
市川 段之丞
中村 歌女次
中村 歌女次
尾上 梅之助
松本 幸右衛門

中 三 人 生 醉
藤間勘十郎 振付

常磐津連中

萩原 俊一
(第八期歌舞伎俳優研修生)

下 汐 汲
尾上菊之丞 振付

長唄囃子連中

長唄 連中
鳴物 連中
竹本 連中
常磐津 連中

薫 樹 累 物 語
めい ぼく かさね もの がたり

二 幕

序 幕
二幕目
殖生村身売の場
絹川堤土橋の場

竹本連中

指導
澤村 可川
中村 梅花
芳村 五郎治
鳥羽屋 里長
田中 傳左衛門
竹本 扇太夫

八月十七日 (土)

十二時三十分 開演
五 時 開演

主催 社団法人 伝統歌舞伎保存会
後援 国立劇場

草摺引 長唄囃子連中

曾我五郎時致 中村 吉三郎
和田の妹舞鶴 中村 歌次

へそれ磯山お、う雲霧や。唯引幕の初霞 蹴破る勢は鳴滝を、昇る鯉竜の如くにて と 長唄囃子連中の唄で、曾我五郎時致が 逆沢潟の鎧を軽々と引提げて父の仇、工藤祐経を討たんと和田の酒宴にかけつけようとする。その鎧の草摺を捕えて 和田の妹 舞鶴が血気にはやる五郎をいろいろと手振り面白く止める、江戸歌舞伎の情趣をもった所作事です。

かいせつ

歌舞伎に「草摺引」の現われた最初は元禄十年五月江戸中村座の「兵根元曾我」の第四番和田の酒盛の場で、曾我五郎と朝比奈との草摺引が根元である。そもそも「草摺引」くらい伝統の系譜をもつ狂言も珍しく、以来、十三編の舞踊に仕組まれた。宝暦以来すべて長唄で、荒事風の興趣をもる大陸摩がことに人気をよんで今日に及んでいる。

今回はその中の「正札付根元草摺引」と正式にはよばれてゐるもので、朝比奈に代って、和田の妹舞鶴という男まさり

の女で演ずる。

出演の中村吉三郎は、国立劇場俳優養成の第一期修了生、名題昇進者である。現在、中村吉右衛門門下。

一方の舞鶴を演ずる中村歌次は、最も新しい養成出身の七期生で、中村歌右衛門門下。

先輩と後輩の意気がどこまで合うか、まことに見ものの舞台である。

藤間 勘十郎 振付

三人生酔 常磐津連中

駒 吉 松本 幸右衛門
喜代三 中村 仲助
おぎん 加賀屋 歌江

柳のかげが川面にうつる岸べり、中央に小船あり、夏の風情いっぱい舞台面。

へ夜風山風ふじおろし、つくばならいに両国の

へ夕にし涼の夕景色 三人乗りのさわぎ船

と、三人酒をくみかわし、酔うほどに、へエイなんだかむ

尾上 菊之丞 振付

汐 汲 長唄囃子連中

蟹女 刈藻 尾上 梅之助

か／＼癪に障ってきたぜ」と喜代三の怒り上戸 へなんだ、癪に障った。癪に障ったか、可笑しい／＼ ハハハ、／＼」と駒吉の笑い上戸 へこれさ／＼そのように訳もないことに腹を立てたり、可笑しくもないことに笑ったりして、わたしや何だか悲しくなつて」と、おぎんの泣き上戸、 三人三様の振りあつて、

へ泣くも 笑うも 腹立も 酒に興ある船遊び 月も及ばば

ぬ雪も及ばぬ眺め花火の賑いは、玉や 鍵や 高尾、川一、

吉野丸 家台囃しの騒ぎ唄

へ吹けよ川風上れよ簾 中のお客の顔見たや で目出度く幕となる。

かいせつ

俗に「夕涼三人生酔」と呼ばれ、「林間三人生酔」と区別されている。

「夕涼」は、「林間」の三人の仕丁が酒に酔って泣き上戸、笑い上戸、怒り上戸を発揮するところを、江戸の下町、粋な男女にかえて、くだけてみせるところに、なんとも云えない風情がある。ともに常磐津の作品、三人上戸の語りわけのむづかしいきかせどころが、踊りてにもむづかしい踊りわけを要求する。いわゆる芝居ごろのある踊りでなければならぬ。歌江・幸右衛門、そして新進の仲助がいかに この粋な江戸舞踊に挑戦するか、本会のもものひとつである。

原曲は、天保九年の作品、

五世岸沢式佐の作曲と伝えられている。

かいせつ

能の松風から取材した歌舞伎舞踊のひとつであるが、「松風物」とよばれる一連の作品の中では、背景に物語を匂わせた程度のもので、むしろ、都の男風俗を身に帯びた海女が、浜辺の気分や習俗を美しく舞踊化して、その風趣を見せるといった方に重点がおかれている。

出演の尾上梅之助は、尾上梅幸門下、尾上音女の芸名で入門、五十三年に現梅之助の名前を許された。すでに脇役中堅どころの年令になったが、今回、大劇場で「一人舞踊」の幕をうけもつ。

日頃の稽古熱心がみのつたものといえよう。

薫樹果物語 二幕

序幕 埴生村身売の場

二幕目 絹川堤土橋の場

百姓 与右衛門 松本 幸右衛門
実ハ 絹川谷蔵 澤村 大蔵
曲金 金五郎 中村 仲助
花扇屋 才兵衛 中村 吉三郎
判人 源六 坂東 大和
百姓 与之吉 在明 俊一
全 畑作 萩原 清
全 蛙六 市川 段之
百姓娘 お孫 加賀屋 歌江
女房 かさね

百姓 与右衛門 松本 幸右衛門
曲金 金五郎 澤村 大蔵
若徒丹 助 中村 福次
島田 重三郎 中村 仲助
歌 形 姫 尾上 梅之助
かさねの亡霊 中村 歌女之丞
女房 かさね 加賀屋 歌江
御守殿 柳 葉

浄瑠璃 竹本 綾太夫
三味線 豊澤 義三郎

幕のあくまで

伊達家のお抱え角力の絹川谷蔵は、主君の頼兼公がお家の悪人達の計畧にかかって島原の花魁高尾に耽溺して家のことなど顧みないので、お家のために高尾を殺して主君の頼兼公を都のうちにおかくまいし、自分は一時、南禅寺の豆腐屋三姉の家に身を隠した。所がその三姉は高尾の実の兄であり、谷蔵を仇とねらう者であった。三姉には、累という妹がい

たが、その累が清水でふと見染めたのは、谷蔵であった。兄の三姉は谷蔵の忠義の心と、妹の累に対する情愛から、谷蔵と累とを夫婦にさせて、主君の頼兼公の身の治まるまで高尾の敵討ちを延ばして、一時二人を谷蔵の故郷の下総の埴生村へ落してやった。谷蔵もその三姉の情ある仕方に感謝して、祝言の夜、高尾の亡霊が妹の累をうらんで、二日目とみられぬ程累の顔を醜くし、足は跛にしたけれど、決して累を見捨てないと三姉に誓って埴生村に落ちていった。

狂言案内

安永六年（一七七七年）今から二〇八年前に、「伽羅先代萩」は奈河竜輔によって書かれ、大阪中の芝居で上演されました。

しかし、一方、江戸では、翌年の安永七年に、初代桜田治助により、「伊達競阿國劇場」が中村座で上演されました。

安永年間には、宝暦の田沼時代のあとです。やがて、松平定信の寛政の改革がはじまる。前夜の時代です。

奇しくも、ふたつの「伊達騒動物」が大阪と江戸で生まれました。

この二作とも、この段階では、素の芝居で、義太夫狂言ではありませんでした。

すぐ、二作とも操り芝居に輸入され、江戸豊竹肥前座で「伊達競阿國劇場」の上演。義太夫浄瑠璃のふしづけされた同名の人形芝居から、今度は役者芝居に再輸入されて、「だてくらべ」が成立しました。義太夫狂言としての「だてくらべ」の方がさきに成立、やがて、天明八年に、再輸入された「伽羅先代萩」が義太夫狂言として成立しました。これが、「花水橋」「竹の間」「御殿」「床下」「対決」「刃傷」で有名な「先代萩」です。この構成は、「だてくらべ」の九幕の長編にもあります。このふたつの

作品は、いづれがあやめ、かきつばたというほどによく似ています。しかし、「だてくらべ」の方は、八幕目に「かさね」の身売りの話がでてまいます。この「かさね」の物語りだけを独立して上演するところから、別名題で「薫樹果物語」が成立しました。

先代尾上梅幸の当り狂言といわれ、三代目中村時蔵が研究に研究を重ねたといわれています。

今回、上演の演出は、これらの先輩の演出を習いましたもので、「累物語」としては、定本化されたものと云えましょう。

「かさね」の伝説は、下総の国、法蔵寺に伝わる伝説でしたが、これを、伊達騒動の世界と組み合わせた卓拔さが、「かさね狂言」としての地位をうちたてました。

与右衛門は高尾殺しの犯人で追われている。その女房が、高尾の妹であるという因果、それと知らぬ、かさねが亭主の与右衛門のために身を売ってまでつくす女心のいじらしさには、涙をとめられません。高尾の怨念が終始、かさねにまといつき、それが与右衛門にさらにかみつき、ついにかさねを殺めるにいたる因果の凄さが、この怪談のおそろしさであります。

登場人物の紹介

曲金の金五郎

目明の金五郎と呼ばれているが、根は遊人、ひそかに、与右衛門を絹川谷蔵と狙いをつけている。賞金かせぎだ。この日も、前日に大名の姫君らしい十六、七の娘に会い家にかくまっているので、百両で売りとはそうと考えている。なんでも、絹川という角力を探ねているらしい……とわざと持ちかけてきた。与右衛門は、ハッと胸をつかれたが何喰わぬ顔、それこそ頼兼公の許嫁の歌形姫と直感したが「品によつては百両で自分の女房にしたい」と云ってひそかに策をめぐらすのであった。百両は大金、それを渡す場所を絹川堤の土橋の際と約束して金五郎を追い返したものの、金の苦面はむづかしい。金五郎は、与右衛門の運命にまさしく重くのしかかってきた。

花扇屋才兵衛と判人源六

吉原の花扇屋は金五郎から、年の頃は十六、七、みるからに美しい女を世話するときこみ、源六をつれて早速品さだめに出かけたのであるが、あいにく金五郎が与右衛門の家に居ると知って追っかけやってきた

のであった。ここで、累は、身売りを思いたつ。運命のいたずらとでもいおうか、吉原などに全く縁のない累の家に、花扇屋と源六があらわれたばかりに、ふと、ひよんな考えが累の胸にわいた。源六とのやりとり、鏡をみせつける、花扇屋とのきまり形など、あわれな進行の中に、たくみな様式美の演出である。「六段目」のお才と判人を想わせる、劇のふし目で、ちよつとしたこういう人物、場面、芝居の薬味がきいていくにうれしいほどである。

歌形姫

与右衛門のあとを追って下総の国までたずねてきたため、金五郎のワナにはまってしまう。頼兼公の許嫁にあたる赤姫の美しい役どころであるが、埴生村には登場しないところがにくい。土橋の場では大活躍、与右衛門はこの姫のため、金の苦面やら、かさねのしつとをうけてますます苦境にたち、ついにかさねを殺すはめに追いこまれる。

島田重三郎

だんまりのいろどり役。ヌーッと出て絵になるもうけ役で、昭和二十六年九月の歌舞伎座で、守田勘弥さんが出演して大向うをうならせた。着ながし、浪人姿の、歌舞伎独特の人物である。

加賀屋歌江

「葉月会」でもおなじみの方々がふえてきた。第二回で「どろ大師」のお弓、昨夏は「朝顔日記」の深雪・朝顔と大役をつとめ、今年は「身売り」のかさねをつとめる。昭和24年7月の三越劇場、26年9月歌舞伎座の三代目時蔵さんの舞台が目に残っている。ことに26年は、初舞台の年でもあった。本来は、派出な芸風であるのに、このじみな初役に挑戦するところに、芸域拡大への自己開発努力はさすがである。二夕役の御守殿柳葉は、面目躍如といった幕切れ、「上橋」の大詰めを是非お楽しみ下さい。

松本幸右衛門

古風で誠実な立役の風は、まさに積み重ねられたものの重みである。「身売り」の与右衛門を今演じるのには最適の人、歌江のかさねとはさぞかし息の合った舞台と期待できる。「葉月会」では「釣女」の太郎冠者、「朝顔」の宿屋亭主徳右衛門「俄獅子」の鳶頭と、おつき合いの感があつたが、今回の与右衛門は、本役である。むづかしい時代世話狂言の与右衛門を、かさね、金五郎、歌形姫を相手にいかに演ずるか、みものである。

中村吉三郎

中村吉右衛門門弟。第一期卒業生で、昭和56年秋の松本家三代襲名披露公演のとき名題披露、吉三から吉三郎になった。「葉月会」はじめての出演で、「草摺引」の五郎は適役。「身売り」では、判人源六という世話の人物もこなす。「稚魚の会」で「引窓」の濡髪に出演するなど最近ますます脂がのってきた。研修生の後輩が多くなればなるほど何かにつけて注視

出演者横顔

〓〓〓がみどころ〓〓〓

されてくるだけに、一期生の中でも肩に重みがましてくるのはやむをえない。それがうまく肥料になって成長している。

尾上梅之助

尾上梅幸門弟。昨夏の「朝顔日記」で浅香、「俄獅子」で芸者をつとめ、美しい舞台が目された。今回、念願の「汐汲」を大劇場で踊る。その胸中いかばかりか、ひたすら稽古あるのみの夏であった。注目の一番である。「身売りのかさね」では、歌形姫を演ずる。昭和24年の三越、26年9月の歌舞伎座ではいづれも、三代目時蔵さんのときに、現在の萬屋錦之助さんが出演した。勿論中村氏の時代で、可れんな舞台が評判になった役である。「上橋」の場の歌形姫は、じつに赤一点という役で、印象に残る役であるから、これもまた期待のお姫様役である。

澤村大蔵

昨夏の「朝顔日記」では、奴関助がかなりの得点をした。それよりも、同じく歌舞伎会で主演した「いがみの権太」は、じつにはまり役で、大蔵さんの実力をみた人は多いだろう。その実績がかわれたことはまちがいない。今回の、曲金の金五郎は、典型的な狂言まわしの役で、腕がなければできないし、また、この役のでき如何では、「殖生村」も「土橋」も、台なしになつてしまふほどの軸役である。先輩では、24年三越のとき、助高屋高助さん、26年歌舞伎座のとき、市川荒次郎さんが演じた役である。

中村仲助

中村勘三郎門弟。研修生第一期の卒業生。

昨夏の「朝顔日記」で阿曾次郎をつとめ、多くの先輩にまじつて、「宇治川」「宿屋」と奮演した。

このときも、右をみても、左をみても先輩ばかりという配役の中で、天下の二枚目役、宮城阿曾次郎を好評の裡にやりお

おせたのだから、じつは周囲もおどろいた。

今回は、やや舞踊にまわった感じがあるが「身売り」の花扇屋才兵衛を、同期の吉三郎の判人源六と共演となる。かさねとからむ鏡のくだりの呼吸がみもので、お見逃しなきよう、賑やかな下座とともに花道から、仲助・吉三郎コンビの、亭主と判人が登場したら、鏡のくだりまで、とくと世話の味をおたしかめ下さい。

中村福次

中村福助門弟。俳優六期卒業生。

映画「女方への道」をご覧になった方は、覚えておいでしよう。普通の高校を卒業して国立劇場の歌舞伎俳優養成所を受講し、二年間の稽古を積んだあと、いかに女方の役者が出るかを描いた、文化映画である。この中で、卒業公演の「寺子屋」が公開され、激烈な、中村又五郎講師の、女方の稽古に堪えているのが、この中村福次である。役は大役の戸浪、じつに感動的な場面があり、今後多くの人の鑑賞に接する機会がのぞまれているフィルムである。

中村歌次

中村歌右衛門門弟。七期卒業生。最新の卒業生で、昨夏は本名で出演していた。

市川段之

しかし、稚魚の会の「伊勢音頭」でお紺をつとめて注目された。今回、「草摺引」の舞鶴に抜きされ、先輩の吉三郎の相手をつとめることになった。なにしろ、大劇場である。莊重で、優雅な「草摺引」の舞鶴は、女方舞踊の試金石であり、今回の「序」の踊りである。勉強発表会とはいいながら、二十二才の若冠にして、この大物を踊れる今日の時代を歌舞伎の新時代とみるのは大げさであろうか。つきっきりで、指導にあたられた振付の藤間勘五郎師の熱意にはみている者の頭が下がった。以て銘すべき、期待の序開きである。舞鶴への、きたんなきご批評をおまちする次第です。

坂東大和

市川段四郎門弟。七期卒業生。「身売り」の幕あき、百姓の娘お孫に出演している。可れんな娘形の似合う人で、4月明治座公演の「待春会」(市川猿之助一門の勉強会)で「義経千本桜・鳥居前」の静を演じた。次方／＼に伸びつつある。

坂東賛助門弟。七期卒業生。立役。幕あきの百姓で出演。

目下、賛助一門ですべてを勉強中の身で、その栄養吸収を地道に続けてほしい好青年である。

在明俊一

八期研修生。

萩原 清

八期研修生。

思い出の舞台

昨夏の舞台から 第三回 葉月会

思い出の舞台

59. 8 . 18

年に一回、八月に研修発表をする「葉月会」は、昨夏の第三回で本格的な二幕三場の「生写朝顔話」を上演し、思い出の舞台を残しました。

ご覧になられた皆様には、思い出のアルバムとして、またご覧になれなかった方々にはご想像のしおりに、この舞台記録写真をお届けします。

昨夏は、演奏「二人禿」、演奏「勸進帳」をまづ上演し、竹本連中・長唄囃子連中の研修の成果をご覧

いただきました。

お芝居は「生写朝顔話」二幕三場、宇治川螢狩りの場・宿屋・大井川と三場を上演しました。大喜利に舞踊「俄獅子」で華やかに打出し、幕をとじました。

今後何卒「葉月会」をご支援いただき、勉強会ならではの企画と研修の成果をお楽しみ下さいますようお願い申し上げます。



「俄獅子」 芸者 梅之助 薦 橘三郎



「俄獅子」 薦 幸右衛門 芸者 幸雀



「朝顔日記」 朝顔 歌江 徳右衛門 幸右衛門



「朝顔日記」 朝顔 歌江 阿曾次郎 仲助



「俄獅子」 芸者 歌江 薦 幸右衛門



「朝顔日記」 槇の戸 幸雀 深雪 歌江 楓 歌次 浅香 梅之助

(撮影 石井雅子)

かさね 歌江
与右衛門 幸右衛門



撮影 青木信二

「葉月会」では始めて、宣伝ポスター用のスチール撮りを行った。国立劇場舞台課の全面的な協力をえて、6月23日、「薫樹累物語」土橋の場のかさね・与右衛門を撮影することができた。

初のスチール撮影

折から6月公演で歌舞伎座出演中の、歌江・幸右衛門の夫婦コンビは、舞台を終えて国立劇場にかけつけ、忙しい中を待ちかまえる衣裳・床山・小道具さんらのバックアップをうけ、無事に

撮り終えた。「宣伝用ポスターは、いかに勉強会とは云え、今日では大切です。多くの人々にアップルするだけの、真夏の稽古を続けているのですから、今後も、国立劇場や、関係の皆さんに謝の連続であった。」

かさね塚にお参り

Ⅱ祐天寺に歌江・幸右衛門Ⅱ

「薫樹累物語」のかさねと与右衛門を初役で演ずる、加賀屋歌江さんと松本幸右衛門さんは、7月23日午前十一時、揃って目黒の祐天寺にある「かさね塚」にお参りした。

祐天寺は、東急線祐天寺駅から三分という近きにある古寺で、かさねの解脱伝説にあらわれる祐天上人安息の寺といわれ、浄土宗の名刹である。

境内は広く、枝葉をいっぱいに広げた大木のあちこちに涼しげな木陰ができる広大さ、紋服に威儀を正したお二人は「かさね塚」の墓前で読経を捧げる僧都の後に控えて長い間、手を合わせて、かさね一族の霊を弔うた。

この「かさね塚」は、六世尾上梅幸、十五世市村羽左衛門、五世清元延寿太夫らが、「かさね」の上演による好評を機に、この塚の建立を発起したもので、羽生町の宝蔵寺にある累一族の墓地より霊土を分納してもらって供養したと伝えられている。

歌江さんも幸右衛門さんも、参拝ははじめてではないが、今迄のはいづれも清元による「かさね」の方で、今回の「めいばく」の夫婦役ははじめて。静かな境内に響く読経のあいだ合掌をつづける二人の横顔には、勉強会とはいえ、「かさね」を上演する意気込みが溢れていた。

長唄

芳村伊十 緑
芳村伊十 佐久
杵屋長一 郎
鳥羽里一 郎
松島庄丸

浄瑠璃

常磐津 和佐太夫
常磐津 初勢太夫
常磐津 光勢太夫
常磐津 和光太夫

スタッフ

美術 碓山 喬康
照明 富田 修好
音響 石井 真
舞台監督 持田 諒

三味線

杵屋源次 郎
杵屋榮美 治
松島庄六 朗
杵屋己佐 久

三味線

常磐津 菊助
常磐津 文字蔵
常磐津 絃寿郎
竹本葵太夫
竹本綾太夫

鳴物

福原鶴二 郎
田中佐貴 司
田中勘四 郎
田中欽也 七
望月太左 久
堅田喜代 蔵
酒井伸章 力
井上 力
望月長 輔

三味線

豊澤瑩 緑
豊澤義三 郎
狂言作者 竹柴正二
頭取 葛山鹿之助
つけ打 土佐 伝
後見 尾上梅之丞
中村歌女之丞
坂東大和 男
中村吉男

表紙きり絵

杉江みどり

女子美術大学卒業。洋画・油絵を学んだ。その後、きり絵を独自で制作する。文楽に魅せられ、制作の中芯に据える。
昭和56年5月、ギャラリー百号で「文楽舞伎きり絵展」
昭和57年9月、銀座のギャラリー中島で「浄瑠璃の中に生きる人形たち」をテーマに個展。
昭和58年9月、同じくギャラリー中島で個展。
他に朝日座・文楽劇場のロビー展もおなじみで、将来が楽しみな新進である。26才。

研修発表 二十一年史

社団法人 伝統歌舞伎保存会

昭和／月日	事項	特記
41・2・27	第1回 研修発表会 開催 「対面」「太十」「御所五郎蔵」 「乗合船」(午後4時・1回公演) (農協ホール・大手町)	初の発表会の開催。 基本に重点が置かれた狂言が選ばれた。
41・9・28	関西第1回 研修発表会 開催 「大序」(立稽古型式) 「春日三番叟」「末広がり」 「虫の音」「助六」「両国夜景」 「蓬萊」(午後2時 1回公演) (大阪屋ホール・堺筋)	解説に竹本綱太夫師 が出演した。 立稽古型式が注目された。

42・2・28	第2回 研修発表会 開催 国立小劇場 「鏡山」(竹刀打) 「乗合船」 「三人吉三」(大川端)	始めて国立小劇場で 開催された。 上方演技の伝承に力 点が置かれ、道頓堀の 朝日座に進出
42・9・26	関西第2回 研修発表会 開催 「双蝶々曲輪日記」 角力場・引窓	朝日座 5時開演 (1回公演)
43・3・28	第3回 研修発表会 開催 「車引」 「十種香」 「三人片輪」	国立小劇場 5時半開演 (1回公演)
44・3・24	第4回 研修発表会 開催 「里見八犬伝」(二幕) 「演奏 越後獅子」	国立大劇場 12時半開演 (1回公演) 本公演中の演目と日 時を選び、初の大劇 場での開催が実現。 (国立劇場養成部と 共催)

44・12・22	第5回 研修発表会 開催 「御浜御殿」(二幕五場) 「三人片輪」	国立大劇場 1時開演 1回公演	いよいよ本格化し五場の上演となる。
46・3・24	第6回 研修発表会 開催 「浜松屋」 「勢揃い」 「素襖落」	国立大劇場 1時開演 1回公演	
46・12・20	第7回 研修発表会 開催 「太 十」	国立大劇場 2時開演 1回公演	
47・3・23	第8回 研修発表会 開催 「天一坊」 一幕 「賤機帯」	国立大劇場 1時開演 1回公演	

47・4・26	第3回 関西研修発表会 開催 「松の緑」 「皿屋敷」 「戾賀籠」	御堂会館 12時開演 1回公演	5年ぶりの開催
47・8・13	第1回 稚魚の会 開催 「太 十」 「吉野山」	国立小劇場 12時・5時 2回公演	稚魚の会 初公演 2回公演はじまる
48・9・25	第9回 研修発表会 開催 「黒田騒動」三場	国立大劇場 12時半開演 1回公演	第2期研修生の試演 会と併演。
48・12・18	第10回 研修発表会 開催 「五段目」 「六段目」	国立大劇場 1時開演 1回公演	

54 ・ 8 ・ 27 26	53 ・ 8 ・ 13 12	52 ・ 8 ・ 26 25
第7回 稚魚の会 開催 「車 引」 「五・六段目」	第6回 稚魚の会 開催 「対 面」 「三 社」 「伊勢音頭」	第5回 稚魚の会 開催 「石切梶原」 「草摺引」 「野崎村」
12時・5時開演 2日間4回公演 国立小劇場	12時・5時開演 2日間4回公演 国立小劇場	12時・5時開演 2日間4回公演 国立小劇場

51 ・ 7 ・ 31 30	50 ・ 8 ・ 21 20	49 ・ 8 ・ 15 14
第4回 稚魚の会 開催 「太 十」 「弁慶上使」 「乗合船」	第3回 稚魚の会 開催 「大藏卿」 「落 人」 「吃 又」	第2回 稚魚の会 開催 「賀の祝」 「寺子屋」 「京人形」
30日 5時開演 31日 12時 5時開演 (3回公演) 国立小劇場	12時・5時開演 2日・4回公演 国立小劇場	12時・5時開演 2日・4回公演 国立小劇場
		2回公演を2日間行 う。

55・8・1 2	第1回 若鮎の会 開催 「真如」 「新口村」 「釣女」 大阪労働センター 1日 5時開演 2日 12時 4時半開演 (3回公演)	関西研修発表会は暫くぶりに再開 名称も「若鮎の会」として発足。
55・8・26 27	第8回 稚魚の会 開催 「七段目」 「落人」 「九段目」 国立小劇場 12時・5時開演 2日間4回公演	
56・8・22 23	第9回 稚魚の会 開催 「修善寺物語」 「妹背道行」 「熊谷陣屋」 国立小劇場 12時・5時開演 2日間4回公演	

56・8・21 22	第2回 若鮎の会 開催 「車引」 「賀の祝」 「妹背道行」 大阪労働センター 21日 5時開演 22日 12時 4時半開演 (3回公演)	
57・8・7 8	第1回 葉月会 開催 「吉野山」 「猿舞」 「越後獅子」 「船頭」 「神田祭」 「落人」 国立小劇場 〔7日〕 12時 5時開演 〔8日〕 12時	俳優 邦楽若手で 舞踊会を開き 舞踊研修の成果を 発表した。 「葉月会」の発足

57・8・21	第10回 稚魚の会 開催 「だんまり」 「源太勘当」 「太 十」 「勢獅子」 第3回 若鮎の会 「五・六段目」 「乗合船」	国立小劇場 12時・5時開演 2日間4回公演 大阪労働センター
57・8		
58・8・18	第2回 葉月会 開催 「演奏 団子売」 「演奏 京鹿子娘道成寺」 「どんどろ大師」 「供 奴」 「釣 女」	国立大劇場 12時半・5時 2回公演
		国立劇場の後援により 大劇場にて開催。 伝統歌舞伎保存会の自主公演始まる。

58・8・20	第11回 稚魚の会 開催 「賀の祝」 「廿四孝」 「どんつく」 第4回 若鮎の会 「太 十」 「伊勢音頭」 「勢獅子」	国立小劇場 12時・5時開演 2日間4回公演 大阪労働センター
58・8・3	第12回 稚魚の会 「鎌倉三代記」 「神田祭」 「伊勢音頭」	国立小劇場 12時・5時開演 2日間4回公演
59・8・18	第3回 葉月会 「演奏 二人禿」 「演奏 勧進帳」	国立大劇場

59
・
8
・
19 18

「生写朝顔話」

宇治川

12時半・5時

宿屋

2回公演

大井川

「俄獅子」

第5回 若鮎の会

大阪労働センター

「熊谷陣屋」

「引窓」

「あやめ浴衣」

「越後獅子」

発行 昭和60年8月17日

〒102 千代田区年町4 1 国立劇場
社団法人 伝統歌舞伎保存会

葉 月 会

事務局 成島和男

☎ (265)7411番

印刷 ハイビジネス